



ASSOCIATION FOR RENGEIN TANJOJI INTERNATIONAL COOPERATION.
認定特定非営利活動法人
れんげ国際ボランティア会

みろくの風

Vol 74



先生から絵本を受け取る子どもたち ミャンマー、イラワジ管区

-contents-

目次

- ミャンマーの子どもに絵本が届きました!・・・2・3P
本部事務局 工藤絢花
- ウクライナ現地支援予定のご報告・・・4p
本部事務局
- 熊本でのウクライナ避難民受け入れを開始・・・4・5P
本部事務局
- 発展するミャンマーでの教師への人材育成研修・6P
ヤンゴン事務所 平野喜幸
- 真に必要とされるNGO (NPO) を目指して・・・7P
本部事務局長 久家誠司
- サポートのお願い・・・8p

れんげ国際ボランティア会

当会の活動は皆様からお寄せ頂く
募金に支えられています。

あなたの支援が世界へ届きます。

れんげ国際ボランティア会の活動をご寄付でご支援ください。難民援助や貧困地域での教育支援などのさまざまな活動は、皆さまからの継続的なご支援に支えられています。

ウクライナ避難民受け入れ

ロシアからの軍事侵攻を受け、住む場所を奪われたウクライナ避難民の生活支援のために使われます。熊本県玉東町で安心安全に暮らせるように日本語教育、就労就学支援等サポートを致します。

一口：10,000円

おまかせ募金

特に寄付金の使途を指定せず、当会に一任して頂ける場合の募金です。

おいくらでも

チベット教育支援

チベット地方（中国チベット自治区や、青海省、四川省など）からインドに逃れている難民の子ども達にチベット語の物語や小説、副読本をプレゼント。

※5,000円でおおよそ10冊の本を作成できます。

一口：5,000円

会の維持運営費

各活動を継続するためには、現地への旅費交通費、現場との通信費、事務所の維持費（本部や現地）、現地スタッフの給与などが必要となります。このように活動を下支えるための重要な募金が維持会費です。

一口：年間5,000円

ご寄付のお願い

れんげ国際ボランティア会はNGO（またはNPO）と呼ばれる民間の国際協力団体です。ODA（政府開発援助）とは異なり資金力がありません。しかし資金的には小規模であっても、本当に必要な人々に、心のこもった支援ができるよう努力を致しております。その努力が実り、活動に関しては、現地の人々からはもとより、外務省からも高い評価を頂いています（外務大臣表彰を受賞）。今後も世界の人々が日本に対して親近感を抱き、友好関係を築けるような有効な支援事業を続けてまいりたいと考えています。何卒、活動へのご理解を頂き、活動資金へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

■振込用紙は毎号お入れしています■

これは「思い立ったときに、いつでも振り込みできるようにいつも入れておいて欲しい」という要望があるためお入れしています。決して振り込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、既にお振り込み頂いた方、ご不要の方は処分をお願い致します。また、当会は厳しい国の審査を受けた認定NPO法人です。当会へのご寄付は税金控除の対象となります。※個人、法人ともに控除のためには確定申告が必要です。詳しいことは最寄りの税務署や税理士さんにご相談ください。

第74号 2022(令和4年) 9月

季刊/みろくの風 (れんげ国際ボランティア会会報)

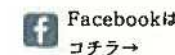
発行人/川原英照

住所/〒865-0065

熊本県玉名市築地2288

電話/0968 (73) 4851

＼SNSで活動を知る／



Facebookは
コチラ→



Instagramは
コチラ→



ミャンマーの子ども達に絵本が届きました!

本部事務局 工藤 絢花

コロナ禍のミャンマー 学校の様子

ミャンマー絵本プロジェクトは新型コロナウイルスの感染拡大と政変後の政治混乱により学習の機会を奪われた子ども達のために、学習の場を増やすことを目的とし実施されました。2020年2月から2021年10月までミャンマー国内の全ての学校は閉鎖され、オンライン学習が普及していないミャンマーではリモート学習は極めて困難であることから、子ども達は学習に関するサポートをほとんど受けておりませんでした。



絵本を受け取った子ども達 (イラワジ管区内小学校にて)



学校へ行けず将来への不安を語る少年
普段とは一転し
ガラランとした教室

ミャンマー絵本学校が閉まっている間に子ども達にインタビュすると、『学校が恋しい』、『勉強が遅れないか心配』や『はやく友達と一緒に学校に行きたい』などと話してくれ、学校が閉鎖されている間のもどかしさがひしひしと伝わって来ました。幸いにも2021年1月に学校は再開されましたが、同年2月の政変による情勢の不安定を配慮し、親が学校に登校させないケースや、学校に登録する時期を逃してしまい、そのまま農作業などの親の仕事の手伝いを優先し学校に子どもを送らないケースなど、学校によっては例年の生徒数を大きく下回るところもありました。このような状況を受け、ARTICは学校に登校している・していないに関わらず、多くの子どもたちに学習の場を提供したいと考え、絵本を出版し学校に配布するだけでなく、感想や絵を書き込むコメントブックもイラワジ管区内の農村地に配布し、作文・絵画コンクールを学校ごとに実施いたしました。

このプロジェクトは、10,000冊の絵本を無料でWebsiteにあげることを目標に掲げ、世界中の子ども達に少しでも多くの良質な絵本を読むことができるようにとイギリスを中心に活動をする団体、Monkey Penに協力を頂き、絵本を提供して頂いています。ミャンマー語に翻訳して印刷した絵本は①Homework Yuck (宿題なんて!) ②Terrance the turtle (亀のテランス)です。両作ともテーマは思いやり、やさしさを学ぶもので小学生に人気な物語です。



家で時間を過ごす子ども達

コメントブック の扱い方パンフレット

子ども達に楽しく絵本を読んでもらい本を読む習慣をつけること、そして本から学んだことを感想文や絵として書くことで思考力も鍛えることができると、絵本を一冊読むと、感想や絵画をかけるページがあり、ひとつ終えるとスタンプリリーの絵を塗ることができるといふ楽しみながらできるものとなっています。また、本の扱い方を学ぶためのパンフレットを作成し、配布しました。本を大切に扱うこと、ご飯を食べる時や汚い手で本を触らないこと、本の中に書き込みをしないこと、雨にぬらさないことなどのとてもシンプルなものですが、学校に図書館がない子供たちは正しい本の扱い方を知りません。本の正しい扱い方を学び、本と共に人生を歩む基盤を子ども達に教えます。



コメントブック



ミャンマー全体図 エーヤワディー管区 拡大図

本の扱い方パンフレット



絵本配布先

ミャンマーのエーヤワディー管区全体の85校にて、3176名の小学生に絵本を2冊、コメントブックを1冊、本の取り扱い方パンフレット1冊の4セット(総数13208冊)を届けました。

寄付金

クラウドファンディングに挑戦し、英語と日本語のサイト、そして当会の会員の皆様から御協力を頂き、総額647,090円もの寄付を頂きました。このように沢山の皆さまから、ミャンマーの子ども達の教育のためにご支援ご声援頂きましたことを、心より感謝申し上げます。

支出内訳	
絵本出版	522,799円
配送費	50,000円
絵本コンクール賞 (車や車など)	42,632円
人件費 (通訳)	21,500円
雑費 (リターン・印刷物)	10,159円
合計	647,090円

提供した絵本

このプロジェクトは、10,000冊の絵本を無料でWebsiteにあげることを目標に掲げ、世界中の子ども達に少しでも多くの良質な絵本を読むことができるようにとイギリスを中心に活動をする団体、Monkey Penに協力を頂き、絵本を提供して頂いています。ミャンマー語に翻訳して印刷した絵本は①Homework Yuck (宿題なんて!) ②Terrance the turtle (亀のテランス)です。両作ともテーマは思いやり、やさしさを学ぶもので小学生に人気な物語です。

絵本提供サイト (英語) Monkey pen



①Homework Yuck (宿題なんて!)



②Terrance the turtle (亀のテランス)



絵本を運ぶお手伝いをする学生たち



成果

- ① 3176名の小学生が絵本を読み、学校に行けなくとも本を読み学習を継続。
- ② 絵本を通して本の楽しさを体験。
- ③ 絵本を読むことから、読み書き、読解力、共感力、集中力の向上に貢献。
- ④ 学校に登校している子ども達は図書館に行く率が増加し、学校に登校していない子どもたちが絵本を読み、登校再開。
- ⑤ 絵本の活動に参加した委員会の先生方や村人の教育に対する意識向上。
- ⑥ 指導担当した先生達のチームワーク力、問題解決能力向上。
- ⑦ 学校内の本の数を増やすこと、本の貸し出し、読み聞かせ、感想文コンクールなどの図書館活動能力も向上し、教育の質向上に貢献

先生達の声



感想を述べる生徒

・自分の子どもの頃に本を読んだことはあったけど、感想などを考えたことがなかった。感想文を書くことで子供の思考力が鍛えられることを実感した。
・感想を書くのが苦手な子どもでも、絵を描くのがとても得意な子がいて驚いた。子ども達が本に興味を持ち始めた。図書館に学生が集まるようになった。

子ども達の声

・図書館にはコミックのような本はあるけど、絵本は初めて読んだ。こんな短時間に5冊もの本を読んだのは初めて。とても簡単だったし楽しかった。
・家に本がないから、本が届いてとても嬉しかった。読むのは簡単だった。
・絵本の絵を真似て書いていたらとても上手に描けた。皆から褒めてもらって嬉しかった。そしてカメのテランスを読んで、友達のアドバイスをしっかりと聞かないといけないと思った。
・絵本を読むのはとても楽しい。何回も友達と兄妹とよんだ。これからもっと本を読みたい。

お礼

ミャンマーの子ども達は新型コロナウイルス感染拡大以前より、社会経済的な理由から多くの困難に直面していました。小学生の子ども達の10人に1人は学校に通っていません。そしてコロナと政変はさらに教育を子ども達から遠ざけました。このような現状を受け、皆様からの温かいご声援を受け最後まで走り抜けることができました。皆様の御協力なしには今日、楽しみにしながら絵本を読んでいる子ども達はいません。遠く離れた国、ミャンマーの子ども達の為に温かいご寄付・ご声援を頂きまして誠にありがとうございます。引き続き、ミャンマーの子供たちの援助に尽力してまいります。

ウクライナ現地支援予定

本部事務局

ウクライナ避難民を熊本県で受け入れ

本部事務局

ウクライナ危機緊急支援への募金を頂き、誠にありがとうございます。現在、提携団体と協力しウクライナの皆様への支援の準備を進めております。提携団体は、4月末から5月頭にかけて、多くのウクライナの方々が避難しているポーランドとモルドバへ現地調査に赴き、現地の方々の声を聞いて来ました。また、現地で活動をする団体に聞き取り調査を行い、子ども達の勉強の場不足、教育物資の不足、食糧の不足、難民の心のケアの不足などが確認されました。これらの現地のニーズを踏まえ、当会と提携団体は以下の支援を現在検討中です。実際に支援事業が開催されましたら、ご報告させていただきます。

支援内容 (予定)

ウクライナ国内

教育支援を実施している団体と提携
成人向け研修のプログラム(成人教育、職業訓練)を検討中。

ポーランド

- ① 比較的小規模な3つの団体と提携
新学期に向けた子どもたちの教育物資配布(オンライン授業のためのタブレット等)
- ② トラウマセラピーの実施(アートなどを用い、子どもの心のケア)
- ③ ポーランド国内に逃れた避難民の方向けの食糧・生活物資の配布。

モルドバ

難民支援を20年以上行ってきた団体と提携「Educational room」を設置し、避難した先で子どもたちが安心して、安全に過ごす事ができる場作り「子どもにやさしい空間」とは、災害や事故などの緊急事態において、避難した先で子どもたちが安心して、安全に過ごす事ができる場を指します。



ウクライナ避難民を受け入れる玉東町



ONプロジェクトのロゴ



当会は1980年、インドシナの難民キャンプでの支援をきっかけに発足し、これまで40年以上に渡り世界の子どもの明るい未来のために、教育や福祉に関する活動を行ってきました。今回のウクライナ危機を踏まえ、現地での緊急支援だけでなく、ウクライナ避難民が熊本県で安心して安全に暮らせるように、避難民の受け入れ支援を開始しました。2022年6月15日より、熊本県玉名郡玉東町(ぎよくとうまち)と協定を組み、Orange Network Project(通称 ONプロジェクト)と題し、ウクライナ避難民受け入れ、住居提供や学校教育、就労活動等の生活に係る一連の流れをサポートいたします。

ウクライナの方々は、ロシア軍の侵攻により突然平穏な日々を失い、命からがら逃げ出し、不安な毎日を送らざるを得ません。住み慣れた土地を離れ、見知らぬ場所に避難しなければならぬ人々の恐怖や不安はいかばかりのものでしょう。私たちには、莫大な支援ができるわけでもありません。ただ、できることがあるとすれば、それは「寄り添う」ということではないかと思えます。「自分たちに寄り添い、見守ってくれている人達がいる」ということが、難民の皆さんにとって多少なりとも「心の拠り所、そして励み」になると信じます。当会の事業はウクライナの人々のことを思い、行動を共にしてくれる皆様がいくださるおかげで実現できるものです。温かいご支援をどうぞよろしくお願い致します。

第1世帯目の受け入れ

福岡空港で出迎えの様子



避難家族は、8月7日の夜、避難先のポーランドから成田空港を経由し玉東町に到着しました。長旅の後、また日本での生活の幕開けということに緊張していたと思いますが、入居予定の町営団地にある集會場で玉東町の町長や住民らに出迎えられ、安堵の表情を浮かべておられました。

玉東町に到着したのは、ロシアの軍事侵攻を受けて、ポーランドのセンターに一時避難していた夫婦と子ども3人のあわせて5人の家族です。避難民を受け入れるセンターは5000人以上が同じ場所に寝泊まりするような状況で、ウクライナの家には安全性から帰ることができないこと、ポーランド国内では就労・就学も難しい状況でした。そんなとき、SNSを通して玉東町が避難民の受け入れを行っていることを知り、家族で安心安全に暮らせる場を求め、玉東町に避難要請されました。応募後、日本の受け入れ側と数回の面談や、大使館でのビザ取得を行い、無事に日本に避難できることが決まりました。

来日当日、夫婦は「玉東町は自然が豊かで、家族一緒に避難できるということ、この町を選びました。日本は平和であると信じています」と挨拶しました。

避難家族は到着翌日から日本の生活に関するオリエンテーションを受け、日本で暮らすために必要な書類手続き等を行い、晴れて玉東町の住民となりました。現在は、生活に困らないよう、また今後就労就学を目指すにおいては、はたかたせぬ、日本語学習を行っており、日々熱心に学ばれています。

到着後数日は日本の暑さや時差ボケで苦労していたようですが、最近では地域の住民の方と水風船で遊んだり、お味噌汁と一緒に作ったりと交流を深めており、今後は彼らが地域の住民として社会に溶け込めるよう、就学や就労に向けた支援を行っていく予定です。

ウクライナ避難民受け入れ事業は、協定先である玉東町、多くの自治体様、団体様、企業様、そして会員様の温かいご協力のもと実施することができています。玉東町では更に複数世帯を受け入れる予定ですが、彼らのサポートを寄り添いながら行うにはまだ活動資金や物資が足りていません。避難民の方々が安心安全に暮らせるよう、皆様からの活動資金へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

オリエンテーションの様子



玉東町での到着セレモニー



当会スタッフとお絵描き



教師に対する人材育成研修が2年ぶりに実現

ヤンゴン事務所所長 平野喜幸

2022年5月14日から20日まで、ミャンマーのイラワジ管区にて第12回目の人材育成研修が行われました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で2020年3月を最後に1年10ヶ月の休止を余儀なくされていましたが、2022年1月より通常通り、2ヶ月に1度研修を行えるようになってきています。今回の研修もミャンマー国内の各タウンシップから選抜された小学校の校長並びに小学校の教師30名が集まりました。



第12回人材育成研修に参加した先生方

今年に入ってから、人材育成研修は3回実施されましたが、コロナ以前の9回の研修に比べると、研修後に自ら教師の責任と教育の重要性を自覚し変化する教師の数が増え、研修内容の受け止め方が以前より深くなったように感じます。ミャンマーでは長年の軍事政権の影響により、教育の質向上に必要不可欠である教師の育成があまり注目されていません。教師が子ども達と向き合い、行動力をもってよりよい教育を届けることができるように、当会では教師としてのモチベーション向上や能力の習得や向上の研修を行っています。研修内容が進化し研修のレベルがあがったのか、それともミャンマーの政情不安のために研修を受ける側の教師の認識が強くなったのかは定かではありませんが、良い傾向です。彼らの研修後の各学校での頑張りのお陰で、イラワジ管区教育事務所の評価も上がり登ります。



教師同士での討論の様子

3月の末から4月に掛けては中高生の作文コンクール実施のために「松下幸之助物語」の本を全タウンシップに配布しましたが、何処のタウンシップに行ってもArticleを知らない人はおらず丁寧に対応して頂き、これも現在行っている人材育成研修の成果であると感じています。人材育成研修に参加を希望する先生方の中には、この研修のことを他の先生から聞き1年以上待ってやっと参加できたという声も頂いており、今までの研修の成果が見えてきたことを実感しています。



チームビルディング研修の様子



研修最後のアクションプランの発表会

真に必要とされるNGO (NPO) を目指して

本部事務局長 久家誠司

最近スリランカの家経済破綻(デフォルト)債務不履行)のニュースがよく報じられています。スリランカは「インド洋の真珠」と称され、海に囲まれた風光明媚な田園国家です。日本とも縁が深く、有名なところではサンフランシスコ講和条約の際、当時の大蔵大臣で後に大統領に就任するジャヤワルデナ氏が「憎しみは憎しみでは消えず、ただ愛によってのみ消え去る」という仏陀の金言を引用し、日本への戦後賠償を放棄してくれました。国じゅうに仏教遺跡が点在しており、敬虔な仏教国としても有名です。

2004年12月、そのスリランカをスマトラ沖地震による大津波が襲いました。国の歴史を1000年遡って紐解いても津波の歴史は見当たらず、つまり津波など見た事も聞いたこともない人々でした。津波の前に見られる引き潮に残された魚介類を喜んで収穫しているところを襲われた子ども達も大勢いたと現地で見ました。今ほどネットも発達しておらず、悪い事には地震により通信網も破壊され、情報の伝達が滞っており、必要以上に被害の拡大があったものと考えられています(約3万人という甚大な犠牲者)。

当会ではスリランカで以前から孤児などをケアする福祉施設の支援を行っており、その縁で先ずは緊急食糧や医療品の配布を行いました。その後スリヤウエワという村において、親を亡くした児童、学生達への奨学金を開始しました。実はスリヤウエワは津波の心配など全くない内陸部に位置しています(被災地から約20km)。しかし、津波当日は日曜日で、現金収入を得るために作った農作物や副産物を持って、お母さんたちが海辺の町ハンバントッタの市場へ出店の為に出かけていました。不運にもその時に被災してしまっただけです。ARTICでは毎年80人、10年間で総数800人に奨学金を授与しました。

一方日本と違いアメリカでは、このNPOは社会福祉、社会活動を支える大きな役割を果たしています。それは日本にはまだまだ基本的な「福祉活動や社会事業はお役所がやるもので、民間には任せられない」という考え方が多数派で、アメリカでは「専門性を持った民間団体が社会のニーズを把握し、問題解決を行っていくほうが効率が良い」という考え方が多数派だからです。従ってアメリカではNPOは社会的な認知と信頼を獲得しており、寄付や人材を得やすいような仕組みとなっています。その結果アメリカには現在NPOが1,300,000団体あると言われています。中には国立公園のガイドや運営、税金集め、ごみ収集といったことまで行う団体さえあります。行政からの委託はもちろん、業種、業態によっても個人や企業から多くの寄付がなされるものも有ります。ちなみに寄付する方もされる方も大きな税制優遇がなされています。日本でも以前とは違い、最近では官と民の信頼関係が構築され、地域の理解も進み、官民連携や民間独自でより良い社会事業を展開するNPOが増えてきています。

スリランカ津波支援



そんな中で当会は6年ほど前、認定特定非営利活動法人を取得しています。この「認定」とは5,2000あるNPO法人のうち、数々の規定をクリアした(例えば厳しい収支報告など)わずか2%の団体にしか与えられていません。そのため皆さんから戴くご寄付は税制優遇を受けることができます(確定申告を行って頂くと、ご寄付の約半分が返ってきます)。私達は国からの優遇を受けて活動ができることに矜持を持ち、未来ある社会づくりを担う団体として努力してまいりたいと考えています。例えば5月からはウクライナ避難民の受入活動を開始いたしました(別ページ参照)今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。